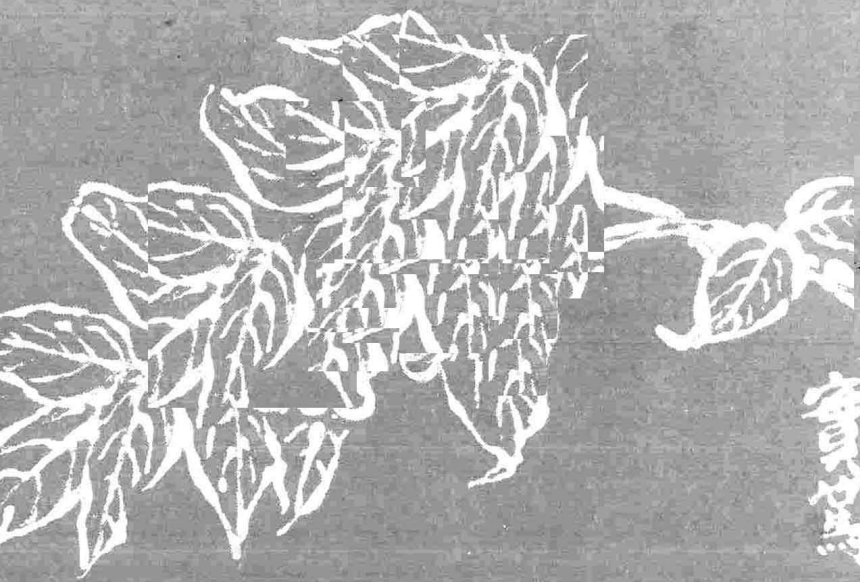
あかつき

あかつき

武者小路實篤



實篤

あかつき

一九六四年三月一日　初版発行
定価　二百九拾円

著者　武者小路実篤
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都中野区松ガ丘二の三一
電話　東京九五一一七九八九
九四四四
振替　東京六四二一一七

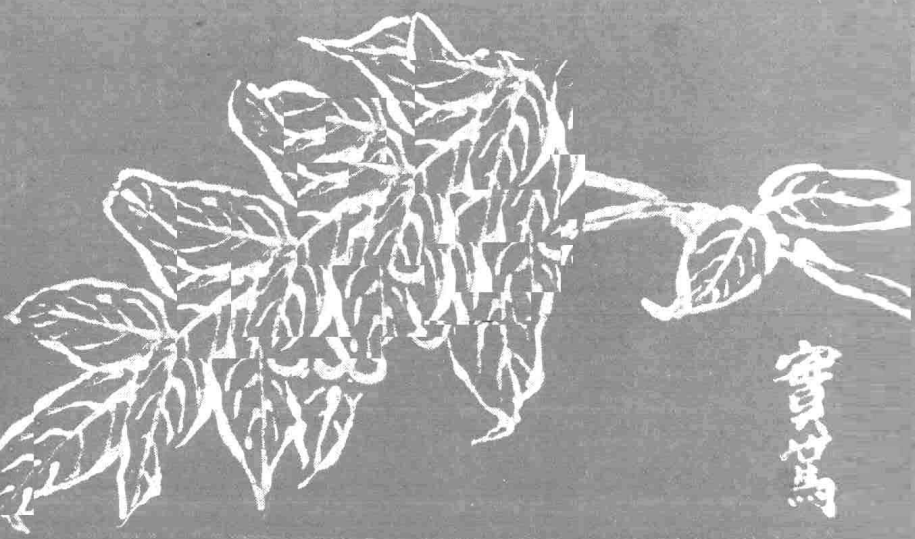
印刷　東洋印刷
製本　誠幸堂

あかつき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あかつき

武者小路實篤



實篤

あかつき

一九六四年三月一日　初版発行
定価　二百九拾円

著者　武者小路実篤
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都中野区松が丘二の三一
電話　東京九五一―七九八九
九四四四
振替　東京六四二一七

印刷　東洋印刷
製本　誠幸堂

序

テレビの「あかつき」が評判がいいのは嬉しいが、僕の小説「暁」を読んだ人はテレビとあまりちがうのに驚くらしく、僕は何度か未知の人から質問を受けた。一々お答えするわけにもゆかないし、お答えしても満足してもらえるわけにはゆかないのでそのまゝにしている。原作が映画化される場合、殊に映画やテレビになる場合、いろいろの条件が入り、原作とはまるで別なものになる事は、僕は今迄の経験でよく知っている。若い時はそのちがいに神経質だったが、昔風の数えで言うと八十歳

になった僕には、その事はあまり気にならなくなった。しかし「あかつき」の評判がいいのは僕のせいだか、脚本をかいた山下与志一君のせいかわからない、僕だけが得をしているような気もしない事はない。役者の方達が感じよくやってくれているのも、勿論評判のいい大半の元因である事もまちがいないし、そうなると演出の中山三雄君らの手柄も勿論認めなければならない。それはそれとして原作者として、僕が不当に好評されていい気になってすましているのも気がひける。自分の実際の作の値打を正当に見てもらいたい気もする。「友情」や「愛と死」はわりに忠実にテレビでやられたが、その他でこのテレビの一番のより処は「幸福な家族」と「あかつき」だと思う。両方ともテレビとは随分ちがっているが、この二つは「テレビ」を見た人で原作との関係に興味のある人に読んでもらいたく思っている。読んだ人はがっかりするか、思いあたる所があるかと思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ともかく一年間日曜日をぬかして毎日やる事になったのだから、脚本をかく人も大変だったろうと思う。僕としては全部山下君に任せて、安心し、見て楽しんでいたのは事実で、僕はちがう点に就ては責任は持たないが、その点感心している方が多いので、不服は言う気はないのだ。役者の方達には大いに好意を持ち、少しもいや味がなく心をこめてやってくれてるので、評判のいいのも、当然だと思っている。僕の気持がわかる人々でやってゝもらっているので、僕も毎日たのしく見ていられたのは事実だ。ただ芝居に出てくる画や、書が気になればなるが、之は芝居だから、いゝものだと仮定して気軽に見のがしてもらいたい。僕は「あかつき」を見る人に、テレビとは関係が少しちがうが、「幸福な家族」と「あかつき」二つは原作者として読んでもらいたい気もするので、この本を出す事を本屋にすゝめたのである。恐らく「あかつき」を見た多くの人は之を読んで満足しないと思うが、一部の人、その人こそ、僕が僕の

ものゝ愛読者と言いたい人と思うが、喜んでくれるように思うのである。

テレビの「あかつき」は三月一杯で終るが、この本を喜んで読んで下さる方はその後にもあると思っている。

昭和三十九年一月三日

武者小路実篤

あかつき

幸福な家族……一三
暁……一四九

装幀は武者小路実篤先生の自装です。見返しに印刷した原稿のうち、『あかつき』は今回特に武者小路先生に書いていただいたものであり、『幸福な家族』は実篤文庫保存のものを使わさせていただきました。

口絵の近影は中川孝氏の撮影によるものです。

幸福な家族

一

「お父さん、この頃お兄さん少し変よ」
佐田正之助の娘綾子は父にそう言った。
「あいつは昔からへんだよ」
正之助は下手な——家族は皆口ではそう言っている——油画をかきながら、気のりがなさそうに言った。
「お兄さん、へんでもかまわないのね」
「それはへんによっては気にならないこともないが、しかしあいつは馬鹿じゃない。あいつのすることはあいつに任せているのだ。少し位へんなことがあったってほったらかしておく方がいゝ。しかしお母さんが心配しているというのなら別だが」
「お母さんは御存知ないの」
「お母さんにお饒舌りのお前が言えないことか」
「それは言えないことよ」
「そうか。それなら事少し重大だな」
「それはそうよ」
「お前はあわてものだから」
「だって私、お友達から聞いたのよ」
「何を聞いたのだ」
「お兄さんが、女の方と歩いているのを見たって」
「あはははは、それはお前と歩いているのを見たのだろう」
「馬鹿ね、お父さんは、私のお友達が見たのよ。私だったらすぐわかるわ。それにお友達はひどいことを言うのよ」
「お前の友達は皆お前に似て口が悪いのだろう」
「お友達も始め後から見て、お兄さんに気がついたのでわきにいる女の人を私かと思ったので、声かけようかと思ったのですって、だがどうも私より姿がいいようなので、少しへんだと思って前へ出て顔を見たら、雲泥の差があっておどろいたと言うの、そしてあとでふき出して、ごめんなさい、つい本当のことを言ってと言うの。なお悪いわね」
「お前の方が雲だと思っていればいいさ」
「私をほめるのはお父さんだけよ」
「お前が自信がなくなると可哀そうだからさ」
「まあひどい。だがそれ程でもないわね。まあ十人並より悪くはないでしょう。悪くったって私ちっともかまわないけど」
「仕方がないさ、しかしお前も時によって美しくなるよ。悲観することはない」
「ちっとも悲観なんかしていないわ」
「それは感心だ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com